第 187 回 aaca フォーラム 「日本の伝統音楽を語り囃子を奏す。邦楽の魅力」

望月太左衛

邦楽囃子方（音楽博士）

伝統芸能教場・鼓楽庵代表

特定非営利活動法人

日本音楽囃子文化研究会理事長

「アートと音楽の垣根を越えて」

アートと音楽の垣根を越え、ともに芸術として社会の中で歩む道を学生時代から探してまいりました。大学を卒業して40年が経とうとしている中、東京・台東区のいりや画廊さんとの出会いがありました。ホールや劇場ではなく、画廊で！日本の伝統芸能を聞いて観て体験していただく「ニッポン音展」を2013年から始めました。

ひとことで伝統芸能と申しましてもその範囲は広く、細分化しています。たとえば雅楽は平安時代から、能楽は室町時代から、歌舞伎は江戸時代から、それぞれが創始以来の形を変えずモザイクのように現代まで伝承されています。私が専門にしている「囃子」は、現在その中であらゆるジャンルの伝統芸能と関わりがある音楽です。「囃子」を入口に伝統芸能のエッセンスを感じていただくことが今回の講演の主旨です。

まず、アートと音楽とのつながりを探す中で、「楽器」というモノにまず焦点をあて、囃子の中でも、世界遺産に登録されている能や歌舞伎で活躍する「小鼓」という楽器をとり上げました。日本独自の発達を遂げた、世界遺産の音、響きといえる打楽器です。

小鼓は１本の胴、2枚の革、それを結び組み立てる紐の、大きく三つの部分からできています。『胴』は、砂時計型をしています。桜の木で作られ、内を空洞になるよう彫り、表面には漆を塗り、蒔絵で装飾する場合もあります。『革』は、主に馬の革が使われ、打つ革を「表革」もう一方を「裏革」といいます。これらの胴と革を組み立てる紐を『調べ』と呼びます「縦調べ」「横調べ」という麻製・朱色の二種類の紐を小さな紐「小締め」で革に固定しています。

小鼓の奏法はこの調べを締めたり、弛めたりすることで音の高低をつけます。調べを締めて「タ」という高い音、弛めて「ポン」という低い音に打ち分けます。楽器の音はこのように歌にして「口唱歌（くちしょうが）」という方法で伝承されています。

小鼓とコンビで活躍するのが大鼓（おおつづみ）で、小鼓より乾いた高音を奏で、「チョン」という音で表します。“うれしいひなまつり”という童謡の中に『五人囃子の笛、太鼓～』とあるように、小鼓、大鼓、笛、太鼓、そして謡をうたうための扇で、五人囃子になります。この五人囃子の音楽編成で現在「能楽」が演じられています。

江戸時代、能楽・五人囃子の伴奏に三味線が加わり、「歌舞伎」の音楽として発達してゆきました。メロディも豊かになり、リズムも2ビート、4ビート、8ビートと細かくなってゆきました。打楽器の編成も小鼓、大鼓、太鼓以外に鉦などの金属製のもの、木魚などの木製のものなどが加わってゆき、舞台向かって左手（花道のある下手＜しもて＞）側に「黒御簾＜くろみす＞」と呼ばれる客席からは見えない場所でも演奏されました。黒御簾の中心は大太鼓で、もともとは開演閉演などの舞台進行の合図で使用されていましたが、三味線との合奏や情景描写も担当するようになりました。川の場面で「水音」、海の場面では「波音」を演奏したり、風音、雨音、雪音など自然現象を表現する手法も生まれ、歌舞伎をよりゴージャスに彩る役割を囃子は担ってゆきました。

明治期になり、西洋音楽の影響を受け、箏、尺八など和楽器との合奏が盛んになり、現代では囃子とオーケストラとの共演、ジャズとのセッションも行われています。

この様に囃子をはじめ、真の伝統芸能は常に固定せず今に至っています。これからも伝統を守るため、囃子は変化し続けてゆきます。今後はアートと音楽による本当の意味でのコラボレーションをしてゆきたいと思います。アートと音楽が創る日本文化は日本のみならず世界の宝です。未来に向かって共に歩みましょう！

小鼓
～革、胴、調べで
組み立てる～

五人囃子になってみよう！

歌舞伎音楽の手法 ～水音、雪音など～